

設備設計1級建築士

1. 試験の現状把握

設備設計1級建築士は、8月上旬に開催される「講義」を受けて、10月上旬に行う試験「修了考査」に合格すると取得できる。修了考査は、下記①と②の考査区分に分かれる。建築設備士の保有者は①のみであり、その他の方は①と②が修了考査の内容となる。修了考査は、講義で配布される「講習テキスト」を持ち込むことができる(マーカー、付箋等可)。

- ① 法適合確認(空調換気設備、給排水衛生設備、電気設備、輸送設備の各5問)
- ② 設計製図(設備計画10問、設備設計(空調換気設備、給排水衛生設備、電気設備)の3分野から1つを選択)

ここで重要となるのが、設備設計の中の選択問題、つまり「空調換気設備、給排水衛生設備、電気設備」のどれを選択するかである。電気が専門の方は、「電気設備」を選択することとなる。空調・給排水の設計を日頃している方は、どちらかを選択する必要がある。研究会としては、過去問の分析から傾向がつかめやすい「給排水衛生設備」が有利であると見ている。本講座は2017年から公開したものであり、現在、講座は時間の都合等から「給排水衛生設備」のみを解説する(つまり、空調換気設備、電気設備の解答は行っていない)。左記の選択問題以外については、全てについて解答する。

2. 1回で合格する方法

設備設計1級建築士の合格率は、区分により下記の通りである。
 申込区分Ⅰの合格率(建築設備士無の方):年度により10~30%
 申込区分Ⅳの合格率(建築設備士保有者):年度により50~80%

1回の試験で合格するには、過去問の学習以外にないと言える。逆の言い方をすると、過去問をしっかり学習すれば合格できる試験でもある。設備設計1級建築士は、「建築設備士」を持っていると、試験は「法適合」だけとなる。しかし、この法適合だけでも、テキストをかなり読込、マーカー、付箋して試験に望んでも、簡単に合格できない。その理由は、1問6分で間違い箇所を見つけて、その理由を記述しないとイケないという点である。また、4科目「空調、給排水、電気、搬送」の各5問解答には、足切があるので、時間が無くなりどれかの科目が殆どできないと不合格となる。建築設備士を持っていない方は、設備設計も試験になるが、その難易度は更に高まる。

設備設計1級建築士は過去問解説書が販売されていない。資格学校では、40万円を超える講座もある。当HPは、H21からの過去問解説を掲載しているので、参考にして頂きたい(ただし、図等は手書きできれいではない)。

なお、設備設計1級建築士の講座は、会員講座のみである(下記参照)。また、平成28年の受験フローを下記に示す。

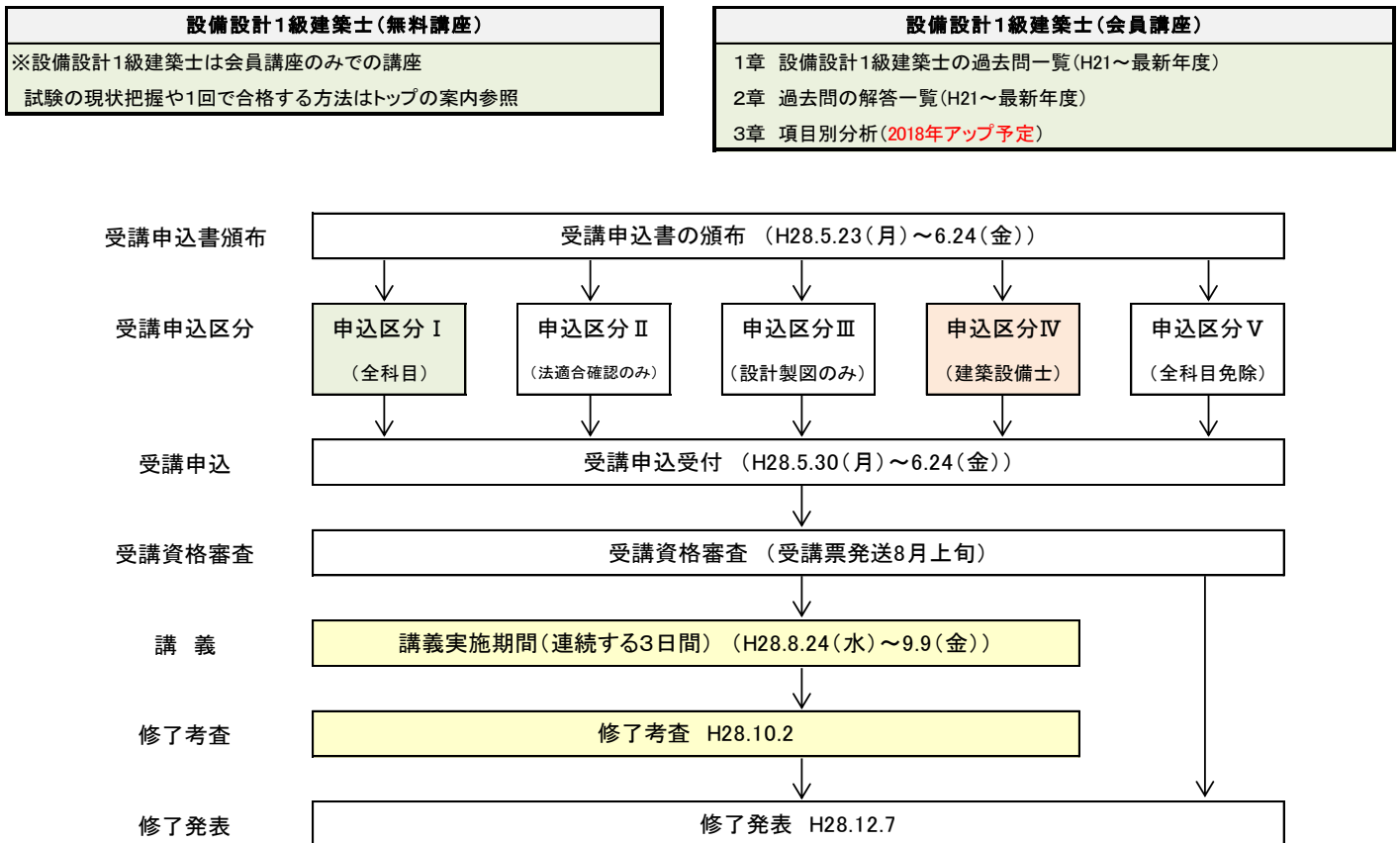


図1 平成28年度の設備設計1級建築士の資格取得までのフロー